東方學會報

ISSN 0912－8158 No.124
一般財団法人東方学会
101-0065 東京都千代田区西神田２－４－１
Tel.03-3262-7221 Fax.03-3262-7227
Website：http://www.tohogakkai.com
E-mail：iec@tohogakkai.com
振替00140-6-184455 令和５年７月28日発行

目次

第六十七回国際東方学者会議の開催……1
〔シンポジウム報告〕
Ⅰ（今西祐一郎）…15 Ⅱ（佐久間秀範）…17
Ⅲ（髙津孝）……20 Ⅳ（豊岡康史）……22
Ⅴ（戸倉英美）……24 Ⅵ（岡田・永田）……27
東洋美術史（板倉聖哲）……29
海外学者の招聘 ……14
第四回中国文化研究国際論壇の開催（渡邉義浩）……32
〔研究室便り94〕中央大学（阿部幸信）……35
新会員紹介（24氏）……37
〔役員改選〕第七期執行部の発足……38
若手研究者の研究会等支援事業（報告）……44
会員通信（34氏）……41 国際集会案内 ……46

第六十七回国際東方学者会議の開催

――四年ぶりの対面開催に八ヶ国二七二名が参加――

令和五年度の第六十七回国際東方学者会議（International Conference of Eastan Studies：以下ＩＣＥＳ）が、五月二十日と二十七日の両日、東京・京都の両地において、令和元年の第六十四回大会以来の対面方式で開催された。東京会議は、日本教育会館において六つのシンポジウムと美術史部会を中心に組織され、二十七日の関西部会は、京都市国際交流会館において講演会と参観のプログラムをもって開催された。東京会議と関西部会には合わせて八ヶ国二七二名の研究者が参加し、会議は盛況裡に開催された。国別参加者数は以下の通り。日本一九八名、中国六一名、台湾・韓国各四名、アメリカ二名、スイス・ドイツ・フランス各一名。

また、第四回中国文化研究国際論壇が二十日と二十一日の両日、オンライン方式で併設開催され、百五名の参加登録があり、こちらも盛会となった。

東京会議

東京会議は雨曇りの五月二十日（土）、千代田区一ツ橋の日本教育会館七・八階において対面形式で開催され、シンポジウムⅤのみオンライン参加にも対応したハイブリッド形式で行われた。六ヶ国二百三十名（日本人一六四名、外国人六六名、オンライン含む）の参加者があった。

午前十時、河口英雄事務局長による開会宣言の後、主催者を代表して斎藤明理事長が以下の挨拶を行った。

第六十七回国際東方学者会議の開催に当たり、東方学会ならびに国際東方学者会議運営委員会を代表してご挨拶申し上げる。

昨年二月に突如始まったロシアのウクライナ侵攻は未だ終わりが見えず、当事国のウクライナのみならず、欧米をはじめ世界各国に大きな影を落としている。また、丸三年を経

A NEW STUDY OF THE *LAOZI*'S THOUGHT
Based on the Mawangdui Texts

ISBN 978-4-924530-09-6

IKEDA Tomohisa 池田知久 (translated by Rolf W. GIEBEL)
(will be published Sep. 2023, 606 pp., hard cover, ¥6,000)
池田知久『『老子』―その思想を読み尽くす』（講談社学術文庫、2017）の改定英文版。巻末に馬王堆帛書甲本に基づく英訳付き本文を付す。

CONTENTS

Preface / Notes on Sources and Editorial Conventions

Part One：Laozi：The Man and His Book

Chapter One：The Man
1. Laozi's biography by Sima Qian in the *Shiji* / 2. Laozi：A person cloaked in mystery /3. The development of the image of Laozi and the formation of *daojia* / 4. The lineup of *daojia* books and personages

Chapter Two：The Book
1. The compilation of the *Laozi* in the late Warring States period / 2. The discovery of the Mawangdui silk-manuscript *Laozi* /3. The emergence of the Guodian Chu bamboo-slip *Laozi* / 4. The emergence of the Peking University bamboo-slip *Laozi* / Conclusion

Part Two：The Thought of the *Laozi* / Preamble

Chapter One：The Philosophy of the *Laozi*
1. Metaphysics in the *Laozi* / 2. Cosmogony in the *Laozi* / 3. Ontology in the *Laozi*

Chapter Two：Ethical Thought in the *Laozi*
1. Overcoming human alienation and gaining agency in the *Laozi* / 2. advocacy of weakness and rejection of strength in the *Laozi* / 3. Apophatic transcendence through non-learning, ignorance, and wordlessness in the *Laozi* / 4. Apophatic transcendence through non-desire and non-action in the *Laozi*

Chapter Three：Political Thought in the *Laozi*
1.The metaphysics and ontology of the Way in the Laozi and unitary rule by the Son of Heaven or emperor/2.The metaphysics and ontology of the Way and government by state sovereigns and their subjects in the *Laozi* / 3. The conception of political order for everywhere under heaven in the *Laozi* / 4. Antiwar thought in the *Laozi* / 5. The mental approach of the ruler in the *Laozi*

Chapter Four：*Yangsheng* Thought in the *Laozi*
1. "Nourishing life" in pre-Qin Confucianism / 2. The birth of *yangsheng* thought and the *yangsheng* thought of early *daojia* / 3. *Yangsheng* thought in the *Laozi* / 4. "Nourishing life" and politics in the *Laozi*

Chapter Five：*Ziran* Thought in the *Laozi*
1. Metaphysics and ontology in the *Laozi*：The Way and the myriad things / 2. The term *ziran* in the Laozi and among *daojia* / 3. The structure of *ziran* thought in the *Laozi* / 4. Politics in the *ziran* thought of the *Laozi* / 5. Contradictions and conflicts between the *Laozi*'s metaphysics and ontology and its *ziran* thought / 6. Excesses of autonomousness/7. A sketch of the history of *ziran* thought from the later Han onwards

Epilogue / **Afterword** / Index to *Laozi* Passages by Chapter Number
Chinese Text of the *Laozi* with an English Translation

映（ドイツ、興福寺庶務部執事）
討論
シンポジウムⅢ「鄭振鐸『中国俗文学史』とその後―歌謡と説唱研究の展開と課題」
司会：高津孝（鹿児島大学名誉教授）
趣旨説明：高津孝
「近百年の中国歌謡研究」大木康（日本、東京大学東洋文化研究所教授）
「元代散曲は文学史上どのように位置づけられるのか」小松謙（日本、京都府立大学教授）
「詞から曲へ―その境界をめぐる諸問題」藤田優子（日本、日本学術振興会特別研究員PD（立命館大学））
「小説・戯曲・説唱を貫くもの―伍子胥の物語を例に」上原究一（日本、東京大学東洋文化研究所准教授）
「『金瓶梅』と芸能―引用と上演描写」田中智行（日本、大阪大学准教授）
「清代四川・湖南唱本の時代的展開とその意味」岩田和子（日本、法政大学教授）
討論
シンポジウムⅣ「ユーラシアのなかの嘉慶維新（一七九九）」
司会：豊岡康史（信州大学准教授）
趣旨説明：豊岡康史
「嘉慶帝の言路政策」村上正和（日本、新潟大学准教授）
「十八・十九世紀清朝における山林境界問題」相原佳之（日本、東洋文庫研究員）
「十八・十九世紀長江流域の米価動向と白蓮教反乱」豊岡康史
「海域史から見る嘉慶期の台湾」李侑儒（台湾、国家海洋研究院助理研究員）
「嘉慶四年の対外姿勢―〝亦た輕がるしく邊釁を挑すなかれ〟」柳静我（韓国、鳥取大学教授）・豊岡康史
コメント：辻大和（横浜国立大学准教授）
多賀良寛（東北学院大学講師）
野田仁（東京外国語大学准教授）
討論
シンポジウムⅤ「中国鬼神論の最前線」
司会：戸倉英美（東京大学名誉教授）
趣旨説明：戸倉英美
「鬼神研究の現状と課題―社会通念としての鬼神観を研究する立場から」佐々木聡（日本、金沢学院大学准教授）
「死人と鬼―戦国秦漢の墓葬文書における死後世界の敵対性と親和性」池澤優（日本、東京大学教授）
「「陽鬼」と「赤鬼」―六朝時代までの中国鬼観念の一側面」王旭東（中国、立正大学非常勤講師）
「仏教化した冥界における幽鬼の鬼と異形の鬼」佐野誠子（日本、名古屋大学准教授）
「張鷟『朝野僉載』について―唐代張氏一族の小説制作を見据えながら」溝部良恵（日本、慶應義塾大学教授）
「『聊斎志異』「章阿端」における冥界の構造」福田素子（日本、聖学院大学非常勤講師）
討論
シンポジウムⅥ「「志」からみた漢唐間の政治文化」
司会：永田拓治（阪南大学教授）
岡田和一郎（佛教大学非常勤講師）
「総論―「志」から漢唐間の政治文化を見るために」岡田和一郎
「禹から漢へ―「溝洫志」類の撰述とその途絶」渡邉将智（日本、就実大学准教授）
「漢晋期における符瑞の叙述―符瑞志成立前史」永田拓治
「劉宋における元徽三年の儀注について―礼志・楽志からみた南朝史の再構築」戸

川貴行（日本、お茶の水女子大学准教授）
コメント：福永善隆（鹿児島大学准教授）
小野響（電気通信大学講師）
堀内淳一（皇學館大學准教授）
討論
○東洋美術史部会
司会：板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所教授）
根立研介（京都大学名誉教授）
「雲谷等顔の画風形成について―山水人物画における実験」金楷妍（韓国、コロンビア大学博士候補生）
「狩野派・長谷川派・海北派合作の「帝鑑図押絵貼屏風」（東京国立博物館蔵）について」徐榕翊（韓国、東京大学東洋文化研究所訪問研究員）
「池大雅における蜀道山水の受容と展開―出光美術館蔵「蜀桟道図」を中心に」楊飄飄（中国、早稲田大学大学院生）
「莫高窟第302窟・303窟の須弥山状柱」折山桂子（日本、九州国立博物館アソシエイトフェロー）
「曇曜五窟の追刻龕の研究」車星璇（中国、筑波大学大学院生）
「小野道風筆「円珍贈法印大和尚位並智証大師諡号勅書」に関する考察―玄宗朝以降の宮廷書風との比較の視点から」陳雪湊（中国、東京大学大学院生）
「上醍醐寺薬師堂の吉祥天像・炎魔天像―12世紀における安産祈願に注目して」Rachel Deborah QUIST（アメリカ、大阪大学招聘研究員）
「文化財としての古写経、テキストとしての古写経」赤尾栄慶（日本、京都国立博物館名誉館員）
○歓迎パーティー（午後五時十分～午後七時）
（九階〝平安〟の間）
挨拶＝岸本美緒（東方学会東京支部長）
乾杯＝礪波護（東方学会顧問）

関西部会

関西部会は、雨の予報もありながら晴天で迎えた五月二十七日（土）、京都市左京区粟田口鳥居町の京都市国際交流会館において開催された。参加者は四ヶ国四二名（昼食懇親会四一名、参観四一名）

関西部会のプログラムは次の通り。

○開会（午前十時三十分）イベントホール
開会挨拶＝赤松明彦（東方学会京都支部長）
○講演会（午前十時四十分～午後一時）イベントホール
「庶民の神仏画としての大津絵についての一考察」クリストフ・マルケ（フランス、フランス国立極東学院教授・京都支部長）
講師紹介・司会＝
赤松明彦（京都大学名誉教授）
「礼経と記の成立」末永高康（日本、広島大学教授）
講師紹介・司会＝
宇佐美文理（京都大学教授）

定刻の十時三十分、一階イベントホールにおいて、赤松明彦京都支部長は、概略以下の挨拶を行った。

本年は待望の対面開催となり、関西部会にお集まりいただいた皆様に感謝申し上げる。

本日は、講演会ではフランス国立極東学院（EFEO）京都支部長のクリストフ・マルケ教授と、広島大学の末永高康教授にお話しいただく。午後からは昼食会と、大津市歴史博物館および三井寺の参観を予定している。大津市歴史博物館は、大津絵の専門家である横谷賢一郎研究員に案内していただく。三井寺は、二〇〇〇年の全国会員総会の折にも参観し、当時は福家俊明長吏にお世話になった。本日はご子息の福家俊彦長吏がご案内くださ

り、先日ユネスコの「世界の記憶」に登録された円珍関係文書も見せていただけることになった。では早速、講演会に参りたい。

講演会では司会の赤松教授が、マルケ教授を以下のように紹介した。

マルケ教授は、フランスのリール出身、一九八九年より文部省の研究留学生として東京大学の美術史研究室に学び、九〇年のICESでは東洋美術史部会で研究発表を行われた。フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）ではジャン＝ジャック・オリガス教授を指導教官とし、九五年には洋画家・浅井忠と明治美術史の研究で博士号を取得された。九七年には日仏会館研究員として再来日し、九九年よりINALCO助教授、二〇〇四年には教授となり、またEFEO東京支部代表に就任された。その後も日仏会館フランス国立日本研究センター所長、EFEO学院長を歴任し、現在はEFEOの京都支部長および京都大学人文科学研究所特任教授として京都に滞在しておられる。ご専門は日本近世・近代美術史であり、日本美術に関する多くの著書をお持ちだが、本日は『大津絵　民衆的諷刺の世界』（二〇一六、角川書店）で取り上げられた大津絵に焦点を当て、「庶民の神仏画としての大津絵についての一考察」と題してご講演いただく。

マルケ教授は、概略以下の講演を行った。

二十五歳の時、秋山光和先生に勧められ、「俳句誌『ホトトギス』に対する画家たちの貢献」と題して東方学会で発表を行った。発表で取り上げた浅井忠は、大津絵のデザイン性を高く評価し、その伝統的な画題を応用した作品も残しており、これが私の大津絵への関心のきっかけとなった。

大津絵の本格的な学術研究は、一九二九年の柳宗悦『初期大津絵』に始まる。柳は関東大震災の翌年に京都へ移り、大津絵を「発見」し、日本の代表的な「民画」と位置付け、海外へも紹介した。近年では、二〇〇六年に大津市歴史博物館の横谷賢一郎氏が、大津絵の歴史と発展を再整理し、図様の変化を示した展覧会を行った。また二〇〇九年の鈴木堅弘氏（京都精華大学）の論考「絵解き文化からみる大津絵について」（『説話・伝承学』第17号）は、大津絵の起源を念仏遊行僧による絵解き文化に求める解釈を試みた。両氏と協力しての科研「大津絵と近世芸能の相関性についての歴史研究」が継続中である。二〇一九年にはパリ日本文化会館と大津市歴史博物館の共催で、「大津絵　十七世紀の大津絵師からミロまで」展を日仏両国で監修し、初期の神仏画大津絵から大津絵画題の絵画や浮世絵まで、百二十点余りを紹介した。

さて、大津絵とは、大津の追分・大谷周辺で作られた庶民画である。発祥は明らかでないが、寛文元年（一六六一）の仮名草子『似我蜂物語』が大津の天神画に言及しており、それ以前から存在していたことは間違いない。当初は追分絵や山科絵とも呼ばれたが、元禄四年（一六九一）に芭蕉が「大津絵の筆のはじめは何佛」と詠んで以来、次第に「大津絵」が定着していった。

大津絵の特徴の一つは、製作過程が合理化され、コストパフォーマンスに優れることである。使用する泥絵の具は墨、胡粉、黄土、朱、紅殻、緑青、薄墨など五・六色に限られる。色面は合羽摺、輪郭線は手書き、顔や手は版木押、幾何学的な形には定規やぶん回しも用いる。神仏画題では、裂を使わず、表具の部分は全て絵の具で描く描表装で、裏打ちはせず、掛けひもと竹軸をつけてそのまま販売する。こうした技法は仏教絵画や仏教版画の影響と思われ、特に描表装や版木押は、世俗画題では用いられない。初期の神仏画が主

流であったころは半紙六枚継ぎの大型の作品が作られていたが、世俗画の登場する十七世紀中ごろからは二枚継ぎ（標準型）になり、世俗画が主流となる十八世紀中ごろには一枚絵の小型、幕末には護符としての四切版も作られた。

関西部会講演会における司会の赤松京都支部長（左）、講演するマルケ教授（中）と末永教授（右）

柳宗悦は一九三〇年、ハーバード大学フォッグ美術館にて大津絵の展覧会を企画した。その解説文のタイトルは“The Peasant Paintings of Ōtsu, Japan”となる。柳の解説には今でこそ首肯しかねる部分もあるが、その研究の価値は画題の整理にある。柳の収集した画題は九十九種にのぼり、それらを「仏教画題」や「民間信仰」などに分類する。仏教画題は十種あり、その代表例として「青面金剛」、「愛染明王」、「達磨大師」が図版で紹介される。ただ、後者二種はそれぞれ一点ずつしか現存しない。また民間信仰の画題七種の代表として挙げられる「大黒」も、二枚継ぎのものは一点しか見つかっていない。手軽な旅土産という性質から保存されないことが、大津絵研究を難しくしている。

これを克服すべく、数年前から明治以降の文献・図録や、内外の公私の美術館・博物館・個人コレクションを調査し、大津絵データベースの構築を継続中である。現在把握している画題は文献だけに残るものも含めて百三十三種になる。その中で、神仏画題は二十種、総数百七十八点。うち半数近くを「青面金剛」が占める。その他の点数の多い作例は「十三仏」、「阿弥陀三尊来迎」、「阿弥陀如来像と位牌」等で、いずれも版木押が使われており、大量生産されたため現存する作例も多いと言える。

「十三仏」の画題は、版木押やぶん回しを使用して全てが二枚継ぎになっている。延享三年（一七四六）の菊岡沾涼『本朝俗諺志』に、僧侶の居ない奥山で法事を行う毛坊主（俗僧）は大津絵の十三仏を本尊に用いる、との記録がある。また明和二年（一七六五）の三代八文字自笑による浮世草子『禁短気次編』には、仏壇を持てない奉公人が大津絵の十三仏を壁にかけて信仰する描写がある。他に「阿弥陀三尊来迎」を仏壇代わりとする作品もあり、江戸中期には、大津絵の神仏画は俗僧や貧民の奉じるもの、というイメージがあったようだ。

一方で、文化十一年（一八一四）の山東京伝『骨董集』によれば、大津絵の神仏画の使用は宝永～享保の頃（一七〇四－一七三六）までは見られたが、現在は大津に一応あるものの昔のものと異なる、という。イメージは定着したが、実際の使用は衰退していたらしい。ただ、寛政九年（一七九七）の『東海道

名所図会』に描かれる追分の大津絵店には、看板の「鬼の念仏」や、客の眼前で仕上げられる「瓢箪鯰」など七種の世俗画と、壁に掛けられた描表装の「阿弥陀仏」など三種の神仏画が見え、当時の忠実な描写か疑問は残るものの、江戸後期の大津で神仏画と世俗画が共に売られていた可能性はある。

「阿弥陀如来坐像と位牌」は、追善供養に用いたとみられ、絵の位牌の部分に戒名と没年が書き込まれるため、作例から製作年代が特定できる。名前を入れず未使用のまま残っているものや、梵字の代わりに「妙法」と書き込まれた日蓮宗徒用のものもある。

「青面金剛」は『陀羅尼集経』の儀軌に忠実に一身四臂で、四臂の青面金剛像は本来、園城寺の相伝儀軌である。最上部に日と月、柄香炉を持つ童子と笏を持つ童子が両脇に立ち、青面金剛の使いの鶏一対と、猿一対が描かれる。江戸時代の庚申信仰の普及に大津絵の影響を挙げる研究もあるが、庚申塔のそれは六臂であるなど図像が異なる。むしろ庚申信仰の普及が、大津絵の需要を促したと考えられる。最初期とおぼしき大型の作例には夜叉一対も見え、三、四枚継ぎの作例もあるが、二枚継ぎの作例では童子も省略されるなど、簡略化の過程がうかがえる。また中型と標準型とで衣文線の描き方や使用した版木が同じ作例もあり、あるいは同じ店で同時期に豪華版と廉価版として販売されていた可能性もあろう。

青面金剛は主として「庚申待」の日に使われるが、神奈川県の個人蔵の作例では、紙背に墨書で元文五年（一七四〇）から文政十二年（一八二九）まで五度にわたり、何かの記念や特別な事情の際に使用したことが記されている。また大津市旧雄琴町では、平成十四年に休止されるまで、大津絵の青面金剛を用いた庚申講が存続していた。作例が多く残っている理由には、こうした使用状況や庚申講による保存環境の違いもあるのかもしれない。

最後に、道歌大津絵について。半紙一枚の小型版で、紙の余白に道徳的な歌が書き込まれたもので、十八世紀末には複数の画題をまとめた巻物も作られた。その詞書には「讃をくはえて童蒙のさとし草となせり」とあり、ここからは大津絵が、初期の信仰のための民画から、児童に道徳を教える教訓絵に変容したことがうかがえる。五十種の画題に百七十一首の道歌を確認済みだが、うち神仏の画題は五種のみで、作例も少ない。「位牌」は、戒名のかわりに親の恩を説く文言が書かれるようになる。「阿弥陀如来」は、小型版の中で唯一版木押が使われ、仏画の技法が残されている。

大津絵の神仏画は、浄土真宗・真言宗・禅宗など多くの宗派の画題を取り入れ、庚申信仰や天神信仰などの民間信仰とも深く結びついていた。また仏教版画の技法を取り入れ、念持仏として掛けて使用されるため描表装も必要であり、大型のものは図像も含め仏教絵画に近く、遊行僧が絵解きに用いる仏具であった可能性がある。個人の所有では残りにくいが、講など共同で用いられる場合は長期にわたり保存される場合もあった。結論というには及ばないが、これまでわかっていることを提示して、本日の講演を終わりたい。

講演終了後、斎藤明理事長が、浮世絵の絵師は名前や画風の違いがよく知られているが、大津絵の絵師についてはどの程度わかっているのか、また日蓮宗徒向けの「阿弥陀如来坐像と位牌」は、阿弥陀如来が釈尊に描き分けられることもあるのだろうか、とたずねた。マルケ教授は、大津絵は無名の作品だが、やはり原画を描いた人物はいたはずで、店同士で競争しているため店ごとの特徴もあった。

ただ、名前となるとわからない。また後者は興味深いご指摘で、今後調査してみたい、と答えて質疑応答を終えた。

続いて、末永高康教授の講演に移った。司会の宇佐美教授は、末永教授を概略以下のように紹介した。

末永高康先生は、一九六四年に静岡県に生まれ、京都大学文学部中国哲学史専攻を卒業、引き続き中国哲学史専攻の修士課程、博士後期課程を経て、九七年から鹿児島大学教育学部に奉職され、九九年には「中国古代天人論考」で京都大学より博士の学位を受けられた。二〇一二年に広島大学大学院文学研究科に准教授として移られ、現在は同研究科教授を勤めておられる。

先生は戦国時代から秦漢時代の思想を専門とされている。昨今、この分野では出土文献研究が盛んとなり、ともするとそれに偏りがちであるが、先生は伝世文献の精密な読解を基礎として、出土文献にも極めて深い造詣をお持ちであることから、両文献を総合した先秦漢代研究を進めて、この時代の思想史研究を牽引しておられる。著書には『性善説の誕生―先秦儒家思想史の一断面』（二〇一五、創文社）があり、また、広島大学東洋古典学研究会の『東洋古典学研究』に、『礼記注疏』の訳注を連載されていることはよく知られる。近年は礼学文献、特に『礼記』諸篇や『儀礼』喪服篇の成立などを中心に研究をされており、今回の講演「礼経と記の成立」では、礼学文献全体に関わる話、それも「経」と「記」の関係という根本的なお話をうかがえるということで、私も大変楽しみにしている。

末永教授は、概略以下の講演を行った。

戦国期の写本とみられる郭店楚簡は、『礼記』緇衣篇とほぼ同内容の篇など、『礼記』の諸篇と一致する文章を多く含んでおり、これによって諸篇の成立は従来の研究が想定していた編年よりもかなり遡ることが明らかとなった。そこで伝世史料と出土資料とを駆使し、孟子の性善説誕生の過程を再検討したのが、ご紹介いただいた拙著である。

このとき、曾子―子思―孟子といったライン以外の戦国儒家の思想史がほとんど研究されていないという現状に気づかされた。『礼記』の議論も思想性の強い篇に偏り、『儀礼』の「経」と関連する諸篇の資料的性質を論じる研究は限られる。そのようななかでも、田中利明「儀礼の「記」の問題―武威漢簡をめぐって」（一九六七、『日本中国学会報』第19集）は有益な示唆を与えてくれる。田中は、武威漢簡『儀礼』は今本『儀礼』のように経と記の境目に「記」字を置いておらず、もともとの『儀礼』に経・記の区別はなかったと考えられることから、その区別の始まった時期について考証を加えた。また、「経」を終始一貫した儀式の次第を記す部分とし、「記」を「経」に記されない儀節の細部や各種口上などを補う「直接的な記」と、経の前提とは異なる状況ではどうするかという附則的な「間接的な記」とに二分した。

田中の区分を意識しつつ各篇を通じて見てみると、例えば士冠礼では「直接的な記」で補記される「吾子将に之に蒞（のぞ）まんとす。敢て宿（すす）む」の口上が、特牲饋食礼では「経」に組み込まれている、といったことに気づく。これは、各篇の成立時期が異なり、「経」を記述する者の意識に変化が生じていることを反映していると考えられる。先行する士冠礼の「経」では口上を不可欠と考えていなかったが、後発の特牲饋食礼の「経」の作者にとっては礼を記述するうえで必要なものと意識されていたため、先行の「経」や「記」を参照して、より完備した記述をしたのである。また各「経」の成立後、礼の記述の完備化は各

「記」によって引き継がれ、おそらく各「経」の成立と各「記」の成立は一部並行して行われた。

さらに、こうした礼経の記述の完備化は、礼それ自体の完備化と連動しているように見える。例えば、凶礼である士虞礼の「経」には書かれていない犠牲の向きが、「記」には書かれており、かつ吉礼である特牲饋食礼とは逆向きにされている。犠牲の配置は礼の吉凶をわける重要なポイントであり、「経」の作者がそれをあえて省略することは考えにくい。ということは、「経」が記された段階では犠牲の配置に明確な規定は存在しなかったが、「記」の記述段階では意識されており、儀節の細部が規定されていったのであろう。

これは「間接的な記」においても同様である。士冠礼では、適子が「阼階」に冠し、「客位」にて醮すのに対し、「間接的な記」の庶子の礼では、冠も醮も「房外」にて行うことが記され、適子と庶子とで儀節に違いを設ける方向で礼を完備化していく。この完備化において、適子が「阼階」に冠し、「客位」にて醮する根拠に対する問いかけがなされ、それが冠礼の儀節の意義を説く「記冠義」を生み出すに至る。

今本『儀礼』の各篇が「経」「記」さらに「記冠義」を含め一つのまとまりを持っていることは、礼の完備化がある時点で一応の完成を見たことを示している。各篇の固定化の順を考えると、大射儀が「記」を一切持たず、少牢饋食礼が「直接的な記」を持たないのは、その成立が固定化の時期に近いため、「記」の作られる暇がなかったことを暗示しよう。逆に、士冠礼に「記冠義」が付せられるのは、その「経」の成立が早かったため、「記」が十分整理されたうえに「記冠義」をも含むに至ったのだと思われる。なお鄭玄の注は「記冠義」も含めて古文のテキストが存在したことを示しているから、『儀礼』各篇は先秦時代に先立って固定化されていたと見なければならない。そして『儀礼』を構成する各篇が固定化された後にも「記」は作られていき、『礼記』の諸篇はその延長上にあるのだろう。

次に、『儀礼』の「経」の規定を、その「記」や「伝」、さらに『礼記』の諸篇がどのように補い完備化していくのかを、喪服篇から見てみよう。

喪服篇では、「経」は斬衰・斉衰・大功・小功・緦麻の五等の喪服とその対象者を列挙形式で示す。だが、最も詳しく規定する本族の服制ですら網羅しきれていないし、「経」の作者の考える服喪の原理も語られない。「経」の体系を推定し、記されていない対象の服喪を補記していくのが「記」であり、さらに「経」「記」の解説として「伝」が存在する。ただ、「経」の原理と「記」「伝」の原理は、必ずしも一致しない。

「記」では、「経」の五服の範囲を超えて、「公子」（諸侯の庶子）が母・妻に服する場合の規定を定めている。これは、大功九月章の「経」に「公の庶昆弟・大夫の庶子、母・妻の為にす」とあるのを、父が既に卒し、適子に公の位が移行した場合の「公の庶昆弟」についての規定と見て、父が生きている場合の「公子」についての規定を「記」が補記したものである。こう規定することにより、「記」は諸侯と大夫の喪礼の違いを拡大するとともに、「経」には明示されていない「喪は、父の在否によって等差づけられなければならない」という原理を新たに持ち込んでいる。

さらに「伝」では、「親」よりも「尊」を重視するという独特の原理が見られる。例えば、母への喪の初出となる斉衰三年章「経」の「父卒すれば、則ち母の為にす」に対して、「伝」は何らの説明も加えない。「父は至尊、

母は至親」といわれるように、子にとっての母はきわめて「親」であるはずだが、「伝」は父の「至尊」はたびたび説いても、母の「親」は説かない。また同章「経」の「慈母（＝父の命で子のない妾を母のない庶子の母としたもの）は母の如くにす」に対しても、「伝」はあくまで父の命を貴ぶために服すとし、「慈母」の温情に対する子の思いへの配慮などは見えない。さらに同章「経」の「出妻（＝離婚した妻）の子、母の為にす」に対する「伝」にいたっては、通常ならばどうしてその規定がなされるかを問う「何を以て～や」から始めるところを、そうしない。そのうえ「出母の親族には服さない」「出妻の子が父の後継ぎとなれば、出母には服さない」という「経」にない規定をも付け加える。父の服さない出妻に子が服することを許す「経」の規定を認めたくないのだが、「経」にある以上説かざるを得ないという、「伝」の作者の苦々しい顔が目に浮かぶようである。『礼記』檀弓上篇において、子思が子に出母への喪を許さず、父が妻としない者は子の母ではない、と諭したことなどは、ここでの「伝」の作者の心情に近いのではあるまいか。

園城寺参観風景（左奥は福家長吏）

「伝」は同様に、「経」にある継父への喪にも規定を付けくわえる。まず再嫁の条件を、「夫が死んで妻が若く子が幼くて、子に大功の親（＝養育の義務を負う親族）がいない場合」に制限し、継父に対しても、「大功の親（＝連れ子を養育する義務）はないが、自分の貨財を費やして、連れ子の為に宮廟を築いてやり、歳時に（連れ子の祖先を）祭らせて、妻はこれに関与しない。これが継父としての道である」とし、これを全うした継父への恩ゆえに喪に服する、と考えているようである。ここには再嫁ひいては継父の存在をできる限り認めまいとする「伝」の作者の意向を読み取れよう。

この「伝」の考えは、『礼記』郊特牲篇にいう「夫死して嫁せず」にきわめて近いところにある。「夫死して嫁せず」は郭店楚簡の『六徳』にも見え、『六徳』は子思学派の作とされること、また子思が子に出母への喪を許さなかったことからすれば、あるいは「伝」の作者は、子思学派と何らかの関係があるのかもしれない。ただ、伝承では喪服篇の「伝」の作者は子夏とされる。喪礼というものを、死者に対する「親親」の情や「孝」から説明する文が大半であるなかで、あくまでも「尊尊」の側面から説明する「伝」の思想的立場はかなり特殊であり、この作者をどの学統に比定するかは、初期の礼の展開を考えるうえで重要なポイントになろうが、私はまだその結論を得るに至っていない。

講演終了後、宇佐美教授が、「経」「記」「伝」の作者あるいは作者達はどのような人たちなのか、またその成立年について、先生の見立てがあればお示しいただきたい、とたずねた。末永教授は、おそらく個人ではなく集団で、成立までにタイムラグがあるからこれだけ記述の形式が異なる、というところま

では推測できるが、正直、現代に残る資料だけでは断定的なことは何も言えない、と答えて、質疑応答を終えた。

昼食懇親会は、午後一時十分から二階の特別会議室において着席形式で行われた。

斎藤明理事長が挨拶に立ち、マルケ・末永両教授に感謝の意を表し、四年ぶりの対面での開催を参加者と共に喜びたいと語った。

また会場では、参加者の増田圭吾氏の厚意により、仏教版画から初期大津絵への過渡期の作例と推定される「十三仏」の展示が行われた。

午後二時、四十一名の参加者は貸し切りバスに乗り、江戸時代に大津絵が売られていた旧東海道沿いに、大津市歴史博物館へ向かった。道中では横谷賢一郎研究員により、大津絵の歴史について、現地と古地図を比定したり絵図を交えてのレクチャーが行われた。

午後二時五十分、大津市歴史博物館に到着した。一同は横谷研究員の案内により、「青面金剛」と、世俗画の代表的画題「鬼の念仏」を中心に、初期から後期にかけての大津絵の図様の変遷を鑑賞した。

午後三時半、三井寺に移動し、福家俊彦長吏に迎えられ、国宝の光浄院客殿の特別拝観が行われた。上座の間に通された一同は、福家長吏の解説を受け、障壁画や違い棚、上段の間の付書院、また広縁とそれに連なる庭園を鑑賞した。さらに文化財収蔵庫に移動し、ユネスコの「世界の記憶」に登録されたばかりの国宝「尚書省司門過所」をはじめとする智証大師円珍関係文書典籍を鑑賞した。当初の予定を超え、午後五時に三井寺を後にし、五条烏丸を経由し京都駅八条口に五時四十分に到着、散会となった。

海外学者の招聘

第六十七回国際東方学者会議に二ヶ国から二名の研究者を招聘

第六十七回ＩＣＥＳの開催に際して、二ヶ国から二名の海外学者を招聘した。東京会議のパネリストとして、「中国文献の異伝・異文と日本古典芸能」シンポに劉瑩氏（中国、浙江大学外語学院日本語言文化研究所特聘副研究員）を、「ユーラシアのなかの嘉慶維新（一七九九）」シンポに李侑儒氏（台湾、国家海洋研究院助理研究員）をそれぞれ招聘した。両氏はそれぞれ関係者の歓待を受け、短期間ではあったが、様々な交流により多大な成果を挙げて帰国の途に就いた。

それぞれの発表は、各シンポジウム責任者の報告をご覧いただきたい。

〔滞在日程〕5月18日（木）劉氏来日。5月19日（金）劉氏、国文学資料館で資料調査。李氏来日。5月20日（土）両氏、第六十七回ＩＣＥＳに参加。5月22日（月）両氏帰国。

東洋学・アジア研究連絡協議会

本年度のシンポジウムは、十二月二日（土）に東京大学国際学術総合研究棟三番大教室において、「東洋学・アジア研究の最前線―ＡＩの活用と課題」と題して開催予定です。

▽春の褒章△

宇野茂彦中央大学名誉教授が瑞宝中綬章を受賞された。

シンポジウムⅠ

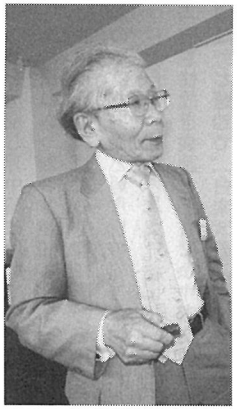
中国文献の異伝・異文と日本古典文芸

今西祐一郎

日本の古典文芸に多くの中国の漢詩文が引用され摂取されていることは、あらためていうまでもない。しかし、日本文芸に採り入れられた漢詩文のなかには、今日中国で通行するものとは異なった本文の見出されることが少なくない。

そこで、本シンポジウムでは、古代中世の日本人が利用していた中国典籍がどのような本文であったのかを、日本側の典籍を手がかりに探ろうと試みた。

最初に佐藤道生氏（慶應大学名誉教授）が「日本に現存する漢籍古写本の特質」と題して、基調講演を行った。



シンポⅠ司会の今西教授

日本には中国から直接に、或いは朝鮮半島を経由して多くの漢籍の写本・刊本がもたらされ、国内に於いてもその書写・刊行が盛んに行われた。これら日本国内に在って日本人の利用した漢籍は総称して「日本漢籍」と呼ばれている。

日本漢籍には、(1)佚存書の多いこと、(2)唐代（或いはそれ以前）の本文を伝える写本が多く現存していること、(3)日本人がこれを学習した痕跡が見出されること等の際だった特質がある。

中国では宋代を境として書籍の形態が写本から刊本へと移行したが、変化したのは形ばかりでなく、本文も改変されることがあった。つまり同じ書籍であっても、唐代の写本と宋代以降の刊本とでは、その本文が大きく異なるのである。しかも中国では、ある書籍がいったん出版されると、その刊本が権威化して、それ以前に流通していた写本を駆逐するという現象が見られる。そのために中国には唐以前の写本が殆ど残っていない。一方、日本では遣唐使や貿易などを通じて将来された唐鈔本が国内で転写され、その本文が広く流通した。そして、その古い本文は、後に宋刊本が将来されても、それに取って代わられることなく、後世に伝えられたことを指摘し、このような観点から、漢籍本文を考察する際にこれまで見過ごされてきた和歌の詞書などの国文学資料、近年新たに見出された日本漢籍古写本・古筆切を取り上げて、その研究意義が具体的に示された。

ついで田村隆氏（東京大学准教授）の「王昭君説話の受容と『西京雑記』」では、我が国の説話集などにおいて紹介されてきた王昭君説話について、異なる二つの王昭君像が見られることに着目する。すなわち、王昭君が胡国の王に下賜された理由を、ひとつは、絵師に賄賂を贈って美しく描いてもらうことを拒否したこととするもの、今ひとつは自らの容姿の美しさを恃んで絵師に賄賂を与えなかったとするもの、である。前者は『西京雑記』に見られ、後者は『今昔物語集』や『俊頼髄脳』など日本の説話集に見出される。原典『西京雑記』とは王昭君のイメージを異にする、日本文献の後者は、王昭君説話の日本における変容かとも思える。しかし田村氏は、『抱経堂叢書』や呉競『楽府古題要解』に収められる『西京雑記』の該当箇所に、王昭君について「自恃容貌」という異文が見出され